

芦丈翁俳諧聞書

東明雅

目次

刊行にあたって……………東	明雅	2
聞き書……………		4
芦丈翁年譜……………『芋日記』より		112
芦丈先生終焉記……………東	明雅	116
五右衛門風呂……………根津 芙紗		123
芦丈先生と信大連句会東	明雅	127
索引……………		131

芦文翁俳諧聞書

東明雅

刊行にあたって

東 明 雅

芭蕉伝来の俳諧は、明治、大正、そして昭和初年あたりまでに殆ど消滅してしまった。其角堂の系統は永機が明治三十七年（一九〇四）に死んだあと、機一・永湖、そして其城まで及んだが振わず、雪中庵系も昭和九年（一九三四）増田龍雨が歿してから、あとは絶えてしまった。春秋庵の系統は三森幹雄が明治四十三年（一九一〇）歿して、準一・保雄と続いた。準一は『連句の実際指導』（昭和七年刊）などを著わして、伝統の保持に力めたが、そのあとを襲いだ鈴木保雄は名のみ存在であった。

辛うじて現代まで残ったのが、伊勢流（北枝・希因・闌更・蒼虬・芹舎・凌冬・芦丈）と、無名庵の系統（野坡……霞遊・其桃・方堂・間石）、さらに美濃派獅子門（支考……蘆元坊……五竹坊……於兔・芦月・十雨）の三つの流れであろう。

昭和四十五年あたりを機として、再び連句は息を吹きかえし、今日では連句復活が叫ばれる時代となった。しかし、その復活した連句は、芭蕉が創り出し、完成させた俳諧と、凡そかけ離れたものとなっているのが実状である。

これは、俳諧の本質や伝統を全く知らない俳人や詩人たちが、なぐさみに連句をもてあそび、己れひとりよしとしたものが、その弟子どもにうけ継がれ、忽ち世に弘まったものである。

連句（俳諧）は、付けと転じを主軸とする日本独自の文学である。これは連歌の時代に発し、芭蕉により完成されたもので、この特質を失った現在の連句は、到底蕉風俳諧の流れとは言い難い。

この点を、はじめて指摘されたのが芦丈先生であった。「連句（俳諧）を滅亡させたのは子規であ

るが、それを歪んだ形で再興したのは虚子である。二人の罪を比べれば、子規よりも虚子が重い」とは先生が常々口にされた言葉であった。

私は先生の遺志を襲いで、何とか現代連句人の蒙を啓こうと努力して来た。ここに先生御生前のお話を再録するのも、先生の真意をその口からそのまま伝えようとする意に外ならない。

刊行にあたって、助力していただいた式田和子さん外の方々に感謝申し上げます次第である。

この一文は、昭和三十八年三月二十二日、松本市浅間温泉土族の湯で、根津芦丈先生のお話を聞き書きしたものである。当時、先生は九十歳だったが、身心ともに壯者を凌ぐほどのお元気であった。

文音
手紙や葉書、フックス
などで句を交換して一巻
を首尾する方法

梅游 (吉岡梅游)

香川県丸亀の人。茂木秋
香の高弟。根津芦丈の教
えもうける。平成二年没

竹邨 (中村竹邨)

高崎在。茂木秋香の高弟。
根津芦丈と肝胆相照らし
両吟集「山一重」あり

秋香 (茂木秋香)

文久三年、現在の深谷市
生れ。昭和一六年没。下
平可都三門

可都三 (下平可都三)

文政五年一明治四三年没。
久米逸淵の門。門人に茂
木秋香、荒井閑窓などが
いる。本名日雅能。国定
忠治の処刑に立ち合った
のは有名

勝幸 (矢羽勝幸)

俳人下平可都三、昭和五
〇年に刊行

忠治 (国定忠治)

江戸末期の代表的俠客。
上州国定村の人。文化七
年一嘉永三年。嘉永三年
四月二日処刑。徳川時
代の末、天保、弘化、嘉
永期における有名な博徒

芦丈 (以下文)

あのまあ、明治時代には旧派は旧派なりで、それは相
当な俳諧師が、全国にかなり沢山居たです。それらの人に習ったのが、
その孫弟子位になって、ハガキが一錢五厘の時分(大正から昭和初期)
にね、生半可に習った者同志が文通(文音)で、何巻もいた、どうし
たなんていうのが、相当の年齢になって来て、その地方のまあ、大先生
というような向きのが至るところにあるです。

明雅 (以下雅) はあ。

文 それでまあ、西の方でね、まあ、今、西の方に行けば丸亀の梅游(吉
岡梅游。平成二年十二月三十日没) だけどね。

雅 梅游さんという方は、最初から先生のお弟子さんでしたか。

文 それは何だ。わしとごく仲よくやった高崎の竹邨(中村竹邨) ね。
あの人がまあ始め教えただね。それで竹邨氏の言うにね、梅游の奴、あ
れ悪達者だからして、ちよつとしぼつてくれなつていつてね。

雅 その竹邨氏はどなたに習われたわけですか。

文 竹邨はね、秋香(茂木秋香。昭和十六年十二月三十日没) という。

雅 そうそう、秋香先生でした。その秋香先生はまた、どなたに。

文 それはかつみという人です。上州の、仮名でかつみという人です
だ。これは明治時代の有名な人です。上州に烏淵(上野国碓氷郡烏淵
村水沼という所あるね。そこのお殿様だ。四千石か五千石かのね(矢
羽勝幸氏著『俳人下平可都三』によれば、同処の名主)。それで戒名など
院殿大居士です。そのまあ、かつみという人はえらい人でね。それで
真庭念流のね、剣術を習う。するとすこし行ったら目録を呉れたらうだ。
何の事だか知らんが貰って。そしてところが、仲間の連中がね、目録と
言っちゃ叩くちうだね。こりや俺が目録をもらったから、野郎ども叩く
んだと。それからして師匠にね、ま、この目録は返すと。目録だけの力
にならねえうちに、こんなものくれるから、野郎ども俺の頭叩いてたま
らねえと言つて、それからみつしり稽古したなんてわ、剣術の方も相当
なものだちうだ。それからしてあれかね、あの郡は何郡だったかね。あ
すこから国定忠治が出て、国定忠治はかつみさんが処分するだね。

雅 それじゃ、幕末から明治にかけての人ですな。

文 そうです。それで、忠治を磔(はりつけ)柱に上げといつてね(嘉永三年四月二
十一日のこと)、それからかつみさんが床几に腰をかけて、「忠治、何

事でも遺言があるなら言え」とこう言ったら、忠治が磔柱からね、「この期に及んで何も言うことはありません」、「上御役人衆、下御役人衆、甚だお手数を相かけます」と言つて、「これでよろしい」と言つた。これに秋香老が話して、「忠治はえらいもんじゃねえか。磔柱の上について、今槍で突かれる前に、上御役人衆、下御役人衆、甚だお手数を相かけます。立派な言葉じゃねえか」と、そういつて話した。それから秋香老もかまわねえ人だもんで、「その槍で突かれた時にや、どんな顔したね」と言つたら、「馬鹿野郎」というわけだね、「そんな事を聞く馬鹿がどこにある」ちうわけだね、「破門するぞ」ちつてね、でかくおこられたというだね。いくら忠治がえらいたつてね、横つ腹へ槍を突かれて笑つてるもんじゃねえだ。

そんな話もありね、そして、かつみという人は何だ、連句の早い人でね。その頃ね、越後に流芳(?)という人があつてね、この人がまあわらんじを二十年はいた。行脚することをわらんじはくというが、二十年も旅つころびで、そりやよくこなれたいい連句だね。それが越中の黒髮庵と言つたが、旅へ出た時おちあつて、やあ久しぶりだったなあちゆうわけでそれから発句見せあつたところが、とてもよくなつていてね、やあ流芳さん、いい句を詠むようになったなあちゆうわけで、それからか

流芳
越後の人

黒髮庵

富山県東砺波郡井波町瑞泉寺一一代住職浪化上人が芭蕉の遺髪を貰いうけて築いた「翁塚」のほか、茅葺きの芭蕉堂、浪化の句碑などあり

琴堂(加部琴堂)
上州高崎の人

松宇(伊藤松宇)
安政六年(昭和十八年)。
本名||半次郎。俳諧の研究、考証に大きな功績あり。加部琴堂門

つみも句を出して、両吟を二巻立てて、二人ではこぶと、したら早いとも早いとも、まあその二時間で二巻まいて、西と東へ別れて行つたというが、二時間じゃねえ、それは正味四時間かかっていると。でも二時間だつていうじゃねえかつたところが、越中の霜井のいわく、そりや、俺のうちの上りはなの事だ、俺が一番よく知つていて、それは人が誇張して、そういう事をまあ二時間に二巻まいたというが、それがいい巻だだ……。それから何だ、上州の高崎に加部琴堂という人があつてね。琴の堂というだ。これもかなりの学者で、高崎一の財産家だね——横浜の開港時分に何をしたかしらんけど、相場で損をしたわけだね——けつこう何も無いような貧乏になつちまつて、それから上田へ行つて借家を借りて、そこでまあ連句をやつたり俳句をやつて晩年はね、伊藤松宇さんは加部琴堂に連句をね、五、六巻教わつたという話だ、二十時分にね。

それで秋香老がお伴をして、かつみ老が琴堂の家へ行つてね——両吟をしている。秋香老はかつみとの両吟をもつていて、それから付ける。

そしたところが、前句を

耻かしと思ふ心が恋やらん

というかつみの句で、それにま秋香老が付けるけど、持つて行きやまず

付かない。付かない。朝から付けてるけど、一句も付かない。それから炬燵にあたっていた所が、炬燵掛けの裏がねカナキンのうらだちうで、随分まあ、琴堂老はね、高崎一番の身上もちの人が、みすばらしい暮らしをしていたわけだ。それから、そのマア、

炬燵蒲団の裏はカナキン

と付けて持つて行つた。そしたら、ンちうわけで、「カナキンならどうした」とこう言つた。ハテ、カナキンがいけねえなと思つて、それからまた炬燵へ来て考えて、

炬燵蒲団の裏はつぎはぎ

として持つて行つたら、「ウン。よろしい」と言つたというけどね。その秋香老が苦心談にまあその話をするが、その付けはね、明治時代の付けだ。それは明治の大家の付けだ。

耻かしと思ふ心が恋やらん

炬燵蒲団の裏はつぎはぎ

と。

雅 ちよつと心付けですな。

丈 つぎはぎだから耻かしいというような、ね。そういう、ま、全部と
うじゃねえが、明治時代の大家というような衆は、大方の人が、ま、

心付け
意味付のこと

そんな風だね。それでそのかつみ老とわしがね、上田の上村館という宿屋で落ちあつて、あの両吟したことがあつたけどね。その時、わしは三十四。三十四だ。かつみ老は八十七でね。八十七だけど眼鏡もかけないでね、達者な人で、それからマア始めたところが、秋のこんでね、ちと寒いで、寢床の中でやりてえちうわけで、それから隣座敷なもんで、真ん中の唐紙を開けて、それから両方の寢床から頭出してね、そしてまあ、硯真ん中に置いてから、わしが付けるとね、筆を取ると、こうやつて見るだね。で付いていると、それでいいと。それから頭あげてみて、付いていねえと、またこうやつて、枕をつける。ハア、また筆を取る音がすると、またこう。

雅 ハツハツハ——。

丈 そうして何しろねえ、夜中ごろまでにねえ——エーなんだ、あと五、六句というところまではこんで、それから老人枕つけて麩をかくもんだで、それでマアめて、それからあと文音でやつたがね——ア、そういう、まあ、そのさつそくな隠居でね——わしや他門との連句というものをそういう人につかつただ、はじめて。

雅 ハーハハー。

丈 その連句はこういう連句で、——

秋なれやまづ一日の夕あかり

と、うん、これを月としていただいて、それからしてね——

まだ日もおかぬ白萩の庭

そうすると老人ね、

せせなぎにあひるがのけば鴨おりて

と、そのほかに、

試みる酒にいつもの友よんで

と。もう一つあったけどそれは忘れたが、どうもそのせせなぎの句が丈

高いもんだで、先生、こりゃ欲しいけれど鴨はただ鴨としとくと冬季だ

ね。じき直して文句も言わずに

降りた鴨尾越の群や誘ふらん

と、尾越の鴨にすれば秋だもんだでね。それから僕がそれにね、

ここな渡しは稀な乗合

と付けて、老人が

どの家も覗いてみれば昼寝どき

それから僕がね

蠅の染汁わるくさきなり

と付けて、そんな表でね、出来て、相当なしつかりした巻だけどね——。

尾越の鴨

初鴨の渡るとき、山を越

すとき、峰すれすれに越

すので尾越の鴨という。

鴨は三冬、尾越の鴨は晩

秋

蠅

蚊帳

この一路

根津芦丈著。昭和三十六年

五月刊。連句集、米寿記

念として、連句三七巻。

ほかに「山一重」「下蔭三

吟」を掲載

にひはり

俳誌。伊藤松宇が明治四

四年六月創刊

猿男（森猿男）

本名川村廉次郎。大正一二

年没、六三歳。東京高商

卒。銀行員。明治二四年

伊藤松宇と俳諧性の友社

を結成。新俳諧の教順に

努め、のち「秋声会」に

属する

黄雨（川村黄雨）

文久三年—昭和一〇年。

江戸生れ。俳諧を森山鳳

羽に学ぶ

エそんなのはまあ、それ（昭和三十六年刊『この一路』へは載せなんだ

けどね——その旧派の連句が載っていると、新しい方面の衆がいやがる

でね。ウーン、ウーン、ウーン。

それで、伊藤松宇さんの連句が今度載るけどね。まことにおぞい連句

だ。相手も悪いけどね。何しろその「にひはり」という雑誌を経営し

ていたけれど、そのまあ組の人と連句をやるけど、制約の研究ばかりし

てね、あの本にはこうあった、この本にはどうあったと言つて、まあそ

の何だだ、何だから何だという、物から物へ飛んで行くような連句でね、

僕どもはそれで傍観していたですわ。その傍観している時分に川村黄雨

という人があつてね。これはまあ、何の森猿男だの、森じゃねえ、猿男

だの。

雅 ハア、ホトトギス一派ですな。

丈 そういう連中の仲間の衆だ。新派の本当のはじめにやつた子規たち

とね、やった衆で、それが貴族院の書記官を一生やつた人だがね。それ

で、森山鳳羽先生が勅選議員で貴族院の生字引ちう人だね。これがいい

連句の人でね、この人にならつてるからして、やつぱり川村さんも傍観

して笑つていた方で。それから、その当時、その仲間に鶴沢四丁という

ね、あつてね、四丁さんはその仲間になつてやつていたけど、どうも本

鳳羽(森山鳳羽)

天保一三年—大正八年
貴族院議員。若年の頃、
大阪の茶飯堂蟻兄に俳諧
を習う。明治、大正の俳
諧の大立者

四丁(織沢四丁)

明治二年—昭和一九年。
千葉県安食の人。本名
芳松。明治二十七年秋声会
に属し、昭和七年「俳諧」
を創刊、連句を提唱した

俳諧

明治二六年、正岡子規が
伊藤松宇らとはからい創
刊したが、二号で廃刊

他石(贅川他石)

明治元年—昭和一〇年。静
岡県生れ。鳳羽に学び連句
の研究、実作家として有名

凌冬(馬場凌冬)

天保一三年—明治三五年

伊那市狐島生れ。本名
学之丞。円熟社を興し、
俳諧をひろめた。泮水園
芹舎門人に根津芦丈そ
の他がいる。「旅唄」「竹
園随抄」

旧派

明治二〇年代新派と呼ば
れた子規、紅葉以外の旧
い伝統をもった流派をい
う

子規(正岡子規)

慶応三年—明治三五年。
本名「常規」。俳句改新に
情熱を注いだ。連俳非文
学論は有名

新派

明治二〇年代からおこつ
た尾崎紅葉、正岡子規な
どの流派をさす

天明の鏡

蕪村など中興期時代の俳

当じゃねえと思うもんだで、僕にマ、いろいろ聞いて来るし、それから
両吟やったり、三吟やったりしてね、「俳諧」という連句専門の雑誌を四
丁さんはじめて。それから何だだ、余程四丁さんにや教えたり、仲間こ
しらえてやったりしたけどね、どうも四丁さんの連句も妙な癖があつて、
いい連句にやとうとうなりっこなし、おしめえになつただがね。ウーン。

そこで四丁さんのこせえたあれは『俳諧辞典』というじゃなく、辞典
のようなかなり厚い本こしらえて出版したのを、まあ、あれはどこから
出したか僕は買ひもしなかつたけどね、そのしまいへね、僕と竹邨氏(中
村竹邨)とやつた両吟を一巻とね、伊豆の長岡の温泉で、他石さん(贅
川他石)が捌きをした「にひはり」連衆のね、その巻と二巻載せてある
だ。それで僕はね、何の、子規が明治二十六年頃、その新聞の「日本」
でね、旧派ひつぱたいてね、いる最中に僕ら旧派の凌冬(馬場凌冬)と
いう人にならつて、旧派のへエその先生が日本一いいと思つて習つてい
る時にまあ、旧派ひつぱたくだね。くそみそに、今に旧派のえらい人に
たたかれるぞと思つていたが、たたく人は一人も出っこなしで、子規の
独り舞台で、新派おこしちまつて、その時にその新派の本当のはじめち
うものは松宇さんの「椎の友」という方が先へ、それへその会へ子規も
よつぽど通つてるです。そのあげくが、その旧派を叩いたのになつて、

それで何しろ子規のひつぱたいたやつがいましましなくてはねえような
気持がついてまわるもんだで、松宇さんの何だだ、「にひはり」という雑
誌仲間になつて。ところが、松宇先生はだんだん何だだ古くなつちまつ
てね。新月並派だとか、天明の鏡が脱げねえとかいうような事をいわれ
て、実際そんな風で、仕舞にはわしらにしても、まあ困つた方で、中途
で逃げられもしなんで、それからそのうちに何だだ、自分の方から出身
の伊東月草というね、あの人「草上」という雑誌出してたもんだで、
それからその仲間になつて、現在の梅の門氏(金尾梅の門)のやつてる
のは、その系統で、そのあとについて来た人だね、ウーン。それで伊
藤松宇さんとの両吟でね、たまたま途中で、文音でやつたもんだでつ
かえるだね。雨の句の打越に月のかんかんと照つている琵琶法師が、背
を向けているというような句だもんだで、雨の打越へ月じゃ困ると言つ
たところが、そんな事はねえと、古人にも例があると、などと言つて例
をあげてまあ反駁して来てね、それで一頓挫した。その例なんぞ、どう
だつたら、

生駒きづかふ綿とりの雨

ちうのがあるだ。それら現在、雨降っちゃいねえだ。そだから月が打越
にあつてもね

風を真似たもの

月草（伊東月草）

明治三二年一昭和二二年
長野県生れ。昭和三年「草
上」創刊。連句は乙字、
根津芦丈に師事。ラジオ
の趣味講座をまとめた「連
句大概」（昭和二二年刊）
がある

梅の門（金尾梅の門）

俳人。明治三三年、富山
生れ。大須賀乙字門。昭
和三三年、「草上」創刊と
もに同人となる

新月並派

明治二二年、松宇は俳諧
維の友社をおこして俳諧
革新の一翼を担った。そ
れが古くなったものを皮
肉つたもの

草上

伊東月草主宰。昭和三年

創刊の俳誌

月の打越
月と雨は天象の打越であ
る

蕉堂（中山蕉堂）
長野県丸子町の俳人。伊
藤松宇の甥

（有明高う明はつる空）

生駒きづかふ綿とりの雨

河内あたりのね、生駒山では、どうも雨が降りはじめたと言つて、急いで綿を取つてると、いう句だもんだで、それは月の打越になつてもね、決してかまわねえと、そな事と、仲々鼻っ柱の強い人だね。

雅 松宇さんですか。

丈 エエ。それから、やがてまあ、

銀燭に背を向けし琵琶法師

と直して来たもんだで、それから又運んで。そしたところが、

ちる花の音きくまでの静かにて

松宇

の次に、わしがね、

子も蹲石を覗く鶴鶴

芦丈

と続けただわね。鶴鶴は秋季だと、いや、秋季たつて、子だからしてい
いと言つてやると、鶴鶴の子という季節は、どの季節の本にもねえと、
季節の本にあつてもなくてもね、ちいさい子のね、黄色い色のうすいよ
うなのがね、花のちる下をね、チョンチョンと飛ぶ所を見たから、わし
が付けたんで、それからそこで又一頓挫やつて、その打越へもつて行つ
て、

馬の呆湯を捨てる谷川

松宇

というね、そいつは本当はまずいだね。

雅 馬の呆湯ですか。

馬の呆湯を捨てる谷川

ね。

丈 だけどもあ、それを又まずいと言つておりや、又へエけんかで止ま
つちまうしね。そこにまあ、馬はいねえと見りやいいだで、我慢してお
いただ。そういう風で、仲々ね、季節にばかりこだわつていいるだ。今度
の入集のには、丸子の蕉堂（中山蕉堂）との巻でね、それにや何がある
ですだ。素秋が、素秋の話しないけどね、素秋という、秋季で月のない
秋をね、素秋と言つて嫌うですだ。ウン、そりや芭蕉にも素秋のところが
あるけどね、それにやそれなりの理由があるですだ。ただ理由なしの素
秋なんちうものはいけねえけど、まあ、松宇さんのやつた仕事だです
で、そのまましといたけど、そこ月を出しや、月が四つも出る巻になつ
ちまうもんだで。

ウン それじゃこれの何だね、自他、それから、おもしろいようなと
ころ、控えはござんすか。

雅 ええ、ございます。

信大連句会

昭和三十六年九月、根津芦丈を指導者として松本市の信州大学を中心に編成された。池田魚魯・東明雅・高橋玄一郎・小出きよみ・藤森雪溪・細田高夷・望月紫晃・藤松素香・田淵芹川・倉科溪水などがメンバー

雪溪(藤森雪溪)

信大連句会

高夷(細田高夷)

信大連句会

魚魯(池田魚魯)

信州大学長、理学博士。

信大連句会のメンバー

紫晃(望月紫晃)

信大連句会

素香(藤松素香)

信大連句会

(これから信大連句会作品第八号、根津芦丈捌、「雪」の巻に対する自解が始まるが、あらかじめ、その作品を紹介する)

雪

根津芦丈捌

雪のバス湖の辺チエン捲き直す

雪溪

スケート肩に人の奔く

同

吹きおろす風ひょうひょうと樹を枯らし

高夷

郵便幾日溜めて届ける

同

宵過ぎてふと名月に気のつきて

明雅

川霧流る峡の一村

魚魯

秋天下コーラスは山の歌ばかり

紫晃

食ひ気盛りも男なみにて

雅

おのづからお夏といふ名おもしろく

同

釣りっぱなしの蚊屋のふくらむ

芦丈

団扇いる程にもあらず松の月

魯

音もこまかに須磨の漣

素香

漁業船拿捕のニュースを又耳に

晃

埃拭うてまはす地球儀

子等はみな都に住ませぢぢむさく

同

土にほはせて早き物の芽

同

花の道善の綱にも続きゐて

香

巣こぼれ雀どこぞにか鳴く

水

人を呑み人吐き霞む城高く

溪

写真記念にとれとすすめる

同

片言の碧い瞳夫婦もてあまし

同

シャネルファイブの薫りどこまで

同

百姓にして客泊める家ありて

同

門の流れに洗ふひともじ

魯

名鐘もひびの入りしか音寒く

同

勸化衆草鞋新しくはき

夷

大和路の空紀の路よりなほ青く

同

剃り立て頭月に照らされ

魯

柿盗む子等のしぐさを可笑がり

夷

村の祭の太鼓聞こゆる

魯

強酒に酔ひしれ出れば野分めき

香

黒潮のりて漁にわく浜

繋ぎをく牛が端綱を舐り切り

何の匂ひか風がもてくる

躬恒形の硯を花に使ひそめ

絹糸のごとけぶる春雨

魯 水 夷 丈 香

昭和三十八年二月二日 首尾

立句
発句のこと

丈 マア、立句のチェン捲き直す。これはまあ、自でも他でもいいわね。エエ、だけど、雪溪さんが自身でチェン捲き直すんでもねえだもんだで、一応これはまあ、そのバスの運転手が、運転手だね、その捲き直している所へ何だだ、スケート肩にした人たちがぞろぞろとひしめいていると。これも他、他で、これをむかいあわせてあるだ。他の向い合せ。

雅 向い付、そういう形ですね。

丈 そうです。それからしてね、

吹きおろす風ひょうひょうと樹を枯らし

とこういうのは、て留めでもらん留めでもないけどね、句柄が相当のびのびしているでしょう。

向い付
前句の人物を見定め、その人物と対応するような別の人物を向い合わせて付ける方法

第三の留め

て、にて、に、らん、もなし、が定法。それ以外のものでも悪くない。例吹きおろす風ひょうひょうと樹を枯らし

冬季三句

夏、冬は一句三句続けてもよい

雅 そう。うまいですね。ところで雪のバスというのと、スケート、これはもちろん冬ですね。樹を枯らすも冬季で、これで、冬季が三句続いておりますませんか。

丈 エエ、これは冬季が三句並んでいるだ。樹を枯らし、だもんでね。けど、それはまあ、制約から言ってもネ、夏冬は一句で捨ててもよいし、三句続けてもいいという。

雅 マア、三句まで並んでいいのですね。これは場の句ですね。丈 これはその場だ。それから、

郵便幾日溜めて届ける

と、これはまあ、こんなウーソン、天気も悪いとかいろいろな時だで、この頃まあ、去年あたりね、イヤ郵便局の、その悪口も言われているが、まあ、そんななんで、それからして、

宵過ぎてふと名月に気がつきて

と、そうするとこれは、うっかりして名月だかなんだか知らなっていたが、ウーソンあれえ月が、やあ名月だぞと、今夜はまあ名月かい、ああそうかいというようなね、郵便がたまって届くというような、そんなうちにあるようなような、マア郵便幾日もその日、その場みたいなものです。

蕉風をふみ出す
蕉風の埒外、ともいう。
蕉風では禁止されている
手法

アシライ
前句の流れや勢いに乗っ
て素直につける付け方。
また、特に、前句の人の
容姿、持物・衣類、ある
いは周辺の器材・食物な
どをもって付けていく方
法をいう

恋離れ
前句が恋句のとき、前句
に付ける恋の句になる
が、独立しては恋の句に
ならないものをいう

雅

宵過ぎてふと名月に気がつきて

は気が付いたんだから、自、自の句ですな。

丈 ええ自ですだ、これはね。それから

川霧流る峽の一村

これはまあ場ですだ。ほいで、川霧があつて月が見えなんだというよ
うな、そういう味を考えることは、ことによると蕉風をふみ出す事にな
るでね。それはさけて考えにやならんだ。ただ川霧のといったつてね、
川霧というようなものは川の上だけの霧でねえ、それで低い霧もいくら
でもあるんだで。それから、

秋天下コーラスは山の歌ばかり

雅 これは自にも他にもなるんですが。

丈 そうですなえ、コーラスは山の歌ばかりだで、これは他とみる方が
いいね、ウン、ウン。それからこの句はねえ、

食ひ気盛りも男なみにて

というと、これは娘たちばつかだね、ええ、このコーラスは。

雅 なりますな。

丈

おのづからお夏といふ名おもしろく

という名は、このなんだだ、食いざかりのね、この娘のうちにそんな名
があるわけだ。

雅 そすと食ひ気盛りはもちろん他になり……。

丈 他で、その次は他のアシライになるだ。

雅 アシライというのはどういう……。

丈 アシライというやつは、その前句のうちのありそうなものをね。そ
れから

釣りっぱなしの蚊屋のふくらむ

と。

雅 ハア、ここが付けにくかったところでしたな。お夏というあれが出
たもんで。

丈 こんなのはちょっとおもしろいだ、こういううけ方ね。

雅 なるほどフンフン、そすとこれはまあ。

丈 これは恋離れになるだ。

雅 マ、これは先生、うまくお付けになったと思つてね、本当に感心し
たんですけど。

丈 こりゃ、あのう。

人情の有無
一句の中にどのような形にしろ人間が詠みこまれている句を人情の句といい、そうでない句を人情なし(場の句)という

物付け
前句の中にある物にすがって付けるやり方。おもに、貞門俳諧で用いられた付合手法。前句のことはを手掛かりに、そのことばに関連することはをもつて連想発展させる契機とした付合の手法

雅 どうもみんな、付け煩っていましたね、ここ。

丈 ほだでわし、付けたけどね。恋離れというものはね、まあ、こんなようなのがね。こりや見方によりや恋でも何でもねえけど、前句の方から言って行くと、そのう、恋の匂いがただようだ。

雅 や、相当残ってますよ、見方によればウン。

丈 恋離れちうものは、一体ね、ここで、そのまるきり人情なしの風景なんぞに、くいと移ってしまうはずいだ。すんなりとその匂いが何ものかあるようにね、こんら恋離れの一寸手本にいいね。

雅 そうですね。

丈 それからこんだ、その時の風景の状況になるだ、

団扇いる程にもあらず松の月

と、フンフンほと、その

釣りっぱなしの蚊屋のふくらむ

というだで、松に月がさして、それからして、ほどよいその風が吹いてることがこれね、団扇のいるほどでもない涼しい、その気分のいいと。それをね、

音もこまやかに須磨の漣

と、風とあつて波というじゃまずいけど、こっちの方、このふくらむも

のとあるけどね。別にまあ風という文字をもつておらないからね、まあ波が。

雅 と、これは音もこまやかにという、こまかにすこし叙情の味がありますかね。

丈 まあないね。

雅 じゃ、人情なしですね。

丈 こらまあ人情なしだね。音といやそりや耳にくる、そりや目、見といやあ目にくる、そりや人情だつて云ったじゃ、あらゆるものはみんな人情なわけで、それで同じなんでもね、まあ見るといふのと、まあそれから聞くという、聞くという方が人情がよほど深くなってくるが、見るちうのは句によつては見るといつてみてもまあ人情なしに扱う、それからここでね、ウンウン、

漁業船拿捕のニュースを又耳に

とウン、これはね須磨の漣というのに漁業船じゃあねえ。その句によつちや。これは物付けになつちまつてね、古風になつちまうけど、漁業船が拿捕されたということをニュースできくだもんだで、その漣と漁業船がちつともさしつかえになつちやねえだ。こういうふうにいけば、まあこんらじゃそうじゃないけど、芭蕉の連句には落とし穴があるというの

はねそれは、あの漣と漁業船じゃいけねえと言つても、いやそうは言つても、これはただニュースで聞いただけだからして、漁業船そのものがそこにねえからいいと、ナルホドと言わせる。まあちよつとした落とし穴の一つのようなね。

雅 なるほど、ニュースを又耳に、これはそれで……。

丈 これは自だね。又かいと、いやなこんだなあと、それから

埃拭うてまはす地球儀

と、これは家の中に入るだね。地球儀で、それからしてその地球儀の埃をはらつてまわすと、ほとそのまあ、地球儀のうちのね、エーどこであるとか、ここであるとかいう、その拿捕したことのまた朝鮮の海だとかいうような、それまでに穿鑿すると、近すぎるということになるけどもね、ただ埃を拭うてまわすきりといつて、ただそれだけのこと、と深く穿鑿しない方がいいだ、こういう付けは。こりや自の句ですだ。

これがね、地球儀や何はただ、床の間の飾りものにしてね、エー埃もはらつたことのないようなのを、埃をはらうという句で、これ、こういう句も珍しい句ですだ。それからして、そのはらうその人とはいうようなこと、

子等はみな都に住ませぢぢむさく

と。

雅 その人の付けですな。

丈 これはまあなんだね、この地球儀の埃をはらう人、その人だ。つまりね、エー、エー。

それから次はね、

土にほはせて早き物の芽

その場の付けだね。

花の道善の綱にも続きゐて

とこれはまあ、善の綱というから、いずれお寺かねえ、エーお堂のような所で、供養塔が建っている。そこへ、まあ、晒の布でなつた縄をね、まあ、それに限つたことはねえが、そのお賽銭箱にね、その供養塔から引っぱつて来てね、お賽銭箱に結び付けてあつた。そんなのわし見たけどね、お賽銭投げてその善の綱に手をふれるだね。

雅 そうすると、これもその場。

丈 そう、その場だね。前句がまあお堂かお寺の庭に物の芽が出てると、それから次が

巢こぼれ雀どこぞにか鳴く

と、雀の仔が巢からこぼれて、エー落ちたか、どこかに、チュウチュウ

その人の付け
七名八体の一。前句の人の動作や行為にふさわしいものを見定め、これを手掛かりに付ける方法

その場の付け
七名八体の二。前句を受けて、そこに詠まれた出来事にふさわしい場所を見定めて付ける方法

善の綱
開帳、供養などの時、仏像の手に掛けて引く五色の綱

玉が転ぶ
一卷の展開が無理なく滑
らかであること

明治維新
一八六八年を中心に関後
二〇余年に亘って大変革
があり、一五代將軍・徳
川慶喜が大政を奉還して
王政復古となり、現代社
会の原型が成立した

新撰組
明治維新の際、徳川幕府
は剣槍に堪能な者を募り
一隊を組み立て、浪士鎮
撫に当たさせた。文久二
年―明治元年。近藤勇、土
方歳三、芹澤鴨など有名

松菊
のちに木戸孝允の妻

実美（三条実美）一八三
七―一八九一。維新の元
勲

具視（岩倉具視）
一八二五―一八八三。維
新の元勲

孝允（木戸孝允）
一八三五―一八七七。維
新の元勲

隆盛（西郷隆盛）
一八二七―一八七七。明
治維新の大功臣

と喋って鳴いていると、その堂か寺の付近にありそうなことだね。
雅 これもその場ですね。

丈 ええ、その場のできごと。またできごとというが、その場になる。
けど、この物の芽がまあ、畑なら畑でこっちはそれは違う場所だね、
生物であり、ウンウン、それでね、この、なんだだ。植物があつて、ま
たこっちの方にエー、かりに道とか橋とかいうようなものになつてく
るとね、この地文、つまり地との関係はどうなると、これへすぐこれなら
いいけれど、またここへきたじゃいけねえから、こういうものを玉が転
ばない、というだ。順に転じて行かにならんやつ、転ばして行つた玉
がここでつかえる、と。

それで、玉が転ぶという事で、最前も森山鳳羽先生の話をしたけれど、
森山鳳羽先生はそれがまことにやかましかつたんだ。それであの先生の
連句を見ると、見事に気持よく玉が転んでいるです。森山鳳羽先生の
話ちつとすりやね、森山鳳羽先生はそのネ、京都の料理屋の出前持をし
ていて、それからそれが明治の維新の時だね、西郷だ木戸だという人た
ちが、もう新撰組に狙われていて、どうにも出て歩けない。木戸なんて
人は縁の下に、そうまあ、あの松菊というその後奥さんになる芸者にか
くまつてもらつて、縁の下にいて、食事はもらつて喰べてたという程の。

まあ、あぶないようになって来てからに、三条だの岩倉だのという人に
手紙やりたけれど、なかなか難しくてやれない。それからその森山、
出前持だもんだでね、それで出前を岡持さげて、それから手紙をもつて
お使いするだ。ハアそれは非常にその事で森山ちうのは役にたつて、そ
れが明治政府が出来てから何年たつてだか知らんが、あの木戸やね大久
保、西郷というような衆が、や、気なしでいたけれども、あの森山もま
あ大変骨折つておらの為によかつたが、あれも何とか役人に取りたてま
いかと、そうだそうだちゆうわけで、さてそれじゃどうするだ、何が
い、ま、今、石川県知事が丁度ねえからして、石川県知事にしてやれち
ゆうわけで、出前持、いちやく石川県知事、まあ、その時分にや県令と
言つたがね、ハアそうした所が石川県知事にした所が、出前持した程の
人で、下の状態によく通じているからして、いやいい知事さんだちゆう
わけで、こんないい知事さんをどこにもやらないでくれろちゆうわけで、
石川県知事何年やつたかね、よほど永くやつたようで、それからして、
あの勅選議員という制度の出来た時にね、第一着に勅選議員になる。勅
選議員で一生暮らしちまうがね。それでそれじゃ、その出前持でいて、
誰に連句ならつたかというかね、大阪の蟻兄という人に習っているだ。
アリノアニという人、何かの集でその名御覧になつた事あるかね。蟻兄

* 正確には富山県令であつた

蟻兄(高松蟻兄)

梅室門。大阪の俳諧師。

茶飯堂と号した森山鳳羽

の師

狐雨

陽が照つてから降る雨、

日照雨

にならつたと。それで淀川をその舟で、下つてはね、蟻兄の所で連句を習つて、又、帰つてくると。それから或る時にね、俺その句ちよつと忘れたけど、狐雨というね、狐の嫁入という、日のてらてらとしてからふる雨のことをね、狐雨という前句でね、それから最前の秋香の話じゃねえが、朝から晩かたまで付けたけど、どうしても付かない。それからして、お暇して出たところが、女持の小扇をひろつたちうだね。それからしてね、その時にやまあ、ぬかるみであつたかねえか、ま、前句が狐雨だからして自分で考えつらうが、

女扇を拾ふぬかるみ

と付けて、どうしても付いているような気がすると思つて、小帰りして、こういう句を、いま、こんな扇を拾つたから付けたつたが、それから、うん、

女扇を拾ふぬかるみ

そりや、男扇だつていいじゃねえかと、それから蟻兄が直してくれたちうだ。

女扇を拾ふ軒下

と。そうすると狐雨が降つて、それから軒下へ屋根下へかりて入つて。

それから女衆の事だて、ま、帯がゆるんでいるとかね、襟がどうしてる

とかいうのをちよつと繕う。その拍子に挟んでいた扇をちよつと置いて、それから忘れて行つてしまつたと。これも最前の話の明治時代の先生たちの付けに近いでしょう。ちよつと理屈があるでしょう。そういう付けをする。それはやがて本当の正風の芭蕉の考えてる正風にはちよつと遠いだ。明治時代の先生ちうものはね、ま、いくらかそういう風に小理屈の付けが時代の連句には多いです。

雅 なるほど、森山という人はそういう方ですか、ホウウとはどう書きますか。

丈 鳳凰の羽、森山鳳羽。それをね、その当時森山鳳羽、渡辺其鳳ね、

渡辺其鳳なんていうのは渡辺昇ね、あの会計検査院や何ややつた子爵だ。

これはおそろしく剣術の強い人で、それで新撰組でも渡辺だけは、どう付けて歩いてても斬れなんだちうがね。強くて隙がなくて、それほどの人でね。それが大阪の府知事をしていて、そうした所が、大阪政府という高張(提燈)を門の外へ二本立ててね、そして、その手前は殿様になつた気になつてゐるだ。そだで、内務省、内務大臣の大久保利通が内務大臣でゐるのに、その命令をちよつとも聞かぬえちうだ。そんな事はいけねえちうだで、それから大久保はね、かなりな人間をまあつかわしちややるけど頑として聞かぬえちうだね。俺が何も大阪を治めるから、内務省あた

其鳳(渡辺其鳳)
肥前の人。明治維新の功臣

利通(大久保利通)

一八三〇—一八七八。隆盛、孝允とともに維新の三傑といわれた

邦武（渡辺邦武）
肥前の人。明治維新の功臣

りいらねえ事いわなんでもいいちうわけで、それから渡辺邦武さんを今度はやるだね。渡辺邦武さんが二十代の頃で、そした所が前に行った連中がね、あんな若僧やったって何ならずちうわけで、笑ってたちうだね。それから行ってみた所が、やっぱり頑固にはねつけてる奴を、渡辺も若い元気でね、負けちゃいなんで、議論をやりからかすだ。そした所が、その若僧めちうわけで、椅子を離れて来て、襟首か何かつかんだちうだね。それから渡辺もきかねえで、とうとう二人で組みついて相撲だちうだ。それから属僚たちが来てね、止めるけれど、かまわなんどけ、この若僧が、こんな者がちうわけで、やるけれども、一方は若い元気だし、片一方は年をひろつてるもんだで、とうとう、しめえにはせつせと汗かくちうだね。それから、へ、そのうちに、ウン内務省にもこんな奴がいたかちうわけで、それじゃ俺のいう事を聞かちうわけで、聞かずに離さねえぞちうで、とうとうその渡辺が説得したちうだ。そで、渡辺はその事が一つで、出世するでかい糸口になったちう逸話があるがね。其鳳という人はそういう人で、それで連句はなかなかうまいだ。

それからその頃ね、鳳羽、其鳳、鳥尾小弥太、これを得庵（？）とい
いね、それから川口男爵というけど、これが梅谷かな、梅谷か梅溪だか、
それから何だだ、中上川彦次郎なんて実業界の三井あたり三菱あたりの

小弥太（鳥尾小弥太）
得庵。福沢諭吉未亡人・
古錦女史の席に連なつて
いた

川口男爵
古錦女史の連衆

彦次郎（中上川彦次郎）
明治時代の実業家。明治
三四年没。三井家に聘せ
らる

古錦
福沢諭吉夫人

蝸堂（松永蝸堂）
天保九年―大正八年。本
名正平七。連句の伎倆世
に聞こえ、一日に一七人
と対吟、満尾して平然た
りという。一代の連句七
千巻という。小築庵春湖
の門

博文（伊藤博文）
一八四一―一九〇九。明
治の元勳。山口県萩の人。
初代首相

寒山（山田寒山）

衆ね、こういう衆がね、慶応義塾に集って、慶応義塾の中にね、その連
句をやるにはいいような、ま、庵のようなものがあつたちうだね。それ
は何の福沢先生の奥さんがコキンという名でね、その連句やつただ。コ
キン女と古い錦の女と書くで。それでそういう連中が集まって、それか
ら駿河の蝸堂が捌きをしてね。蝸堂はそれで慶応義塾でそんな連中を相
手にしてね、よほど得意な時代があるんだ。とうとう伊藤博文まで来た
りしてね。それから伊藤博文の、その何で宮中で行つて連句をやつた事
がある。その連句はどうもね、伝わらないけども、ま、老人のいうにね、
それは満尾しなんだけど、あとで満尾するちうことを言つたけど、まあ
まあ、これは宮中でやつた仕事だで、ここでおくがいと満尾しなかつ
た連句があると、こんな事いつたけどね。それはあの、どうも伝わって
いねえだ。そで伊藤博文だつてね、この何だだ、あの山田だつたかな、
山田寒山という坊さんがね、姑蘇城外の鐘をね、小さい鐘をこせて頒布
会や何やつた寒山という、寒い山というね、その人と連句やつたのがね、
伊藤博文と、

月ひとり秋や占めけん角田川

という伊藤博文の句へね、山田寒山が、

萩折り入れよ管絃の舟

という脇付けてね。その巻、おら、どうも写しときゃよかつたけどね、写しもしなんだ。そういう伊藤博文だつて連句やつただし、そのね、慶応義塾でやったそのそういう連中のやつた巻がいい巻だよ、蝸堂遺稿にやのつてるがね。

蝸堂ちうもんは連句がうまくてね、それはまあそのまことにうまいけれど、それでまあ何だね、蝸堂はまあ、ただ連句きりに遊んでいりやいに、それをね、いくらか商人屋あきやに生まれているからして、油屋して損をしてみたりね。それから何だつたな、何かやつちゃ失敗ばかりしていたなんて話があるがね。それから子供に恵まれなくて、子供に。で、ない児には泣かぬためしや秋の風

とかね、何とかいう句もあつたりしてね。それから孫の徳太郎という者に最後かかるつもりのが、兵隊にとられてしまつたりして、それで娘の嫁入つた先で死ぬがね。それで、その、そういう得意な時代がありながら、恵まれない一生を終つたが、その代わり、連句七千巻やつたちうだね。

雅 七千巻はすごいですね。

文 まあ、そんな巻数やつた者は恐らく類例がねえと、他石さんが何を、句集を作つたがね、『蝸堂遺稿』ちうもんを上下二冊。いい連句がある

春湖（橋田春湖）

明治一九年没。七十二歳。甲府生れ。江戸に出て巨谷禾木を師とする。関為山、鳥越等裁と共に幕末の三大家といわれた

蒼山（摩訶庵蒼山）

文政二年―明治二年。羽前赤湯の人。江戸末期に為山、春湖とともに三大家と称された

烏谷（黙齋庵西烏谷）

浜松の人

引馬野の記

遠江国浜名郡の浜松を古音引馬の駅という。浜松西郊の原野、三方原に南接する。引馬野にほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに（万葉集巻一）

だ。どうも、この蝸堂は春湖に習つてるがね、春湖という者が、春湖、蒼山、契史、この衆の連句がまあ、あの時代でもこんな連句があるかと思ふほどのすばらしい連句だね。

雅 あ、それは皆、幕末の頃ですな。

文 そうだ、まあ、幕末だね。

雅 蒼山というのは、いつかお話に聞いた、駿河かどつかの人ですな。

文 いや、越後の赤湯の人だね。

雅 アオイ山と書く。

文 ウン、アオイ山だ、蒼山ね。それでその蒼山はね、摩訶庵蒼山といつて京都にいて、それからして浜松にね、あそこに烏谷という、カラスのタニという人が、これも相当にいい人で、烏谷がもう老人になつて、ここのおめたちの組では蒼山をよんで、蒼山をここに何して、蒼山に習えという。それからして、この衆に招かれて、そで蒼山は遠州に来て、遠州の見付だね、見付で一生終るですな。一生終るちうけど五十ね、五十幾つだよ。若くて死んでしまうだ。蒼山は文章もよくてね、引馬野の記なんいうものもあり、また、雲鳥日記という、春湖と二人でね、西国廻つて歩いたりして。それで何だだ、春湖はね、蒼山や契史とやつた、その時代のようなものが後には出来ねえだ。相手がねえだ。ほだからし

て、春湖自身は蒼山に決して劣っている人ではないけれど、今度は相手が劣ったものばかり相手にしているで、ほだで、先に死んだ人が得している、後に残ったものが損をしている。そすると、儂から言えば、竹邨は早く死んでおれは後に残ったお陰に、竹邨とやったような巻は、それから後にはできねえと、あれは竹邨のおかげにできたぞと言われたって、しょうがねえだ（中村竹邨）。長生きをして損をしたちうわけだ。

雅 なるほど、ここに出ている「下蔭」じゃない、「山一重」ですか。

丈 それやる時やなん、こういう事です。その前にもまあやってね、ちっとそのみっしりした巻を巻こうとそれからして何句も付けてしなんで、まあ、一句ずつじゃ何だか、まあ二句ずつにして。

雅 ハア、葉書に二句ずつ書いて。

丈 エエ、自信のあるものを付けてやろうと。

雅 それで、相手がえらぶわけですか。

丈 エエまあ、その二句のうちをね。

雅 一つ取るわけです。

丈 取る句がなかったら、言いたい事はいうと、言いたい事はいうけど、喧嘩にならないように、あくまでも、自分たちのこしらえる巻をいい巻にこしらえようという一点に集中して、そしてやろうとするにや、どう

しても一度会って約束しておくがいいちうわけで、それ前にはただ文通だけで、会っていないだ。

雅 年頃は先生と同じぐらい？

丈 儂よりね三つ四つ下だ。それからして、それじゃ、おらほうから行くちうわけでね、儂んそこへ竹邨が来てね、そこで固い約束してね、たとえ、どんな批評を下そうとも、それは句の上の事で、喧嘩にはしないように、旧派の人ちうものは、ちよつとその何かいうと、それをきっかけに喧嘩するです。ウン喧嘩別れになる、そんな事じゃどうしてもだめだちうわけで、それでやったのがその「山一重」だ。それでね、喧嘩しちゃ、こういう事も何だ。甲府に松本守拙という人があって、その人にオラ大変世話になったけど、その人と出雲の松江にね、好一という人があって、三吟でやった事があったがね。わしの句を好一の方へやって、こう廻るのでね。ところが、わしの句がね、

机によれば冷る膝皿

と、膝小僧が冷たいという句を取って、それへ好一が、

一蝶は配所の月をよそ顔に

というのを守拙がきめておらの方によこしたもんで、これはいけねえと。冷る膝皿という自の句でね、絶対動かない自の句へもって行ってね、他

